慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一九二三年蔣介石のソ連訪問
Sub Title	
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の政治学 地域研究 : 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.187- 222
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA8845501X-00000010-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九二三年蔣介石のソ連訪問

山田辰雄

一　問題の所在
二　資料と研究
三　西北計画
四　蔣介石のソ連訪問と「反共」の諸問題
五　蔣介石が見たソ連社会主義
六　結　語

一　問題の所在

本稿は、筆者の蔣介石研究の一環である。

今日、蔣介石研究は新しい段階を迎えつつある。民主化された台湾において、蔣介石・国民党の評価が自由化され、それにつれて相対化された。中国においても、中華民国史の研究が進み、その一環として第一次国共合作ならびに抗日戦争時期における蔣介石・国民党の役割の再評価が行われるようになった。従来の政治的に動機づけられた蔣介石に関する過度な肯定的あるいは否定的評価が後退し、より客観的な研究が可能になったのである。

中国と台湾における政治・社会・学界の変化に平行して、日本においても中華民国史における蔣介石の位置づけについて新たな関心が生まれつつある。筆者は近年、二〇世紀中国政治の連続性を重視し、その枠組みのなかで個々の政治運動、政治指導者を理解する必要性を主張してきた。

「代行主義」は二〇世紀中国の政治指導の連続性の重要な要素の一つである。それは、「エリート集団が人民に代って改革の目標を設定し、人民に政治意識を扶植し、目標実現のために人民を動員するが、人民が自発的に政治に参加する制度的保障を欠く政治体制と政治指導様式」と定義される。

この観点から蔣介石の政治指導を研究するにあたり、いくつかの点に注目しなければならない。第一は、政治指導者が大衆に先行してどのように政治目標を設定するかである。この過程を先導するのは、政党であり、時には政党指導者個人に依存する場合も考慮しなければならない。そこでは、人民は指導される対象として消極的役割を果たすに過ぎないのか、あるいはより積極的役割を果たす可能性があるのかが問われなくてはならない。つまり、政治目標実現のために人民を動員する必要性がある故に、指導部が人民大衆とどのような関係をもつかが焦点となる。

第二の問題は、どのようにして人民に政治意識を扶植するかということである。一般的には、政党の機能の一つは人民に対する政治教育である。その場合、政党指導者が教育される人民の政治意識をどのように捉えるかが重要である。つまり、人民の政治意識の高低は政治指導の在り方に関連してくるのである。

第三の問題は、政府・党の支配に対する人民の異議申し立ての制度化の程度である。つまり、政府や党が人民の自発的政治参加をどの範囲まで許容するかの問題である。そこでは、政治的利害対立を解決するための制度的枠組みが欠如している。このような状況は、中国において軍閥・国民党・共産党などの主要な政治勢力が国家に属さない独自の軍隊と支配地域を有していたという歴史的事実によってもたらされた。[1]

第四は、代行主義において指導部の権力維持が前提となる。したがって、権力維持が絶対化され、そのための装置、方策、資源が問題になる。本稿は、このような観点から一九二三年の蔣介石のソ連訪問を取り上げる。

二　資料と研究

一九二三年の蔣介石のソ連訪問について、これまでいくつかの原資料あるいはそれに類したものが利用されてきたが、それらに加えて近年新たな資料が利用可能になった。旧来のものを含めてそれらを列挙すると、左記のようになる。

① 蔣介石「蔣中正致蘇俄党政負責人意見書」（一九二三年八月五日）。
② 毛思誠編『民国十五年以前之蔣介石先生』、龍門書店、香港、復印版、一九六五年。
③ 「蔣介石日記」（一九二三年分）。

④ 蔣介石「中国革命新前途」、（一九二三年九月）。

⑤ “New Prospects of the Chinese Revolution” (September, 1923).

⑥ “Memorandum of the Delegation of Dr. Sun Yat Sen with Relation to the Proposal Mentioned in the Telegram of A. A. Joffe Sent from Tokyo May 1” (October 1, 1923).

⑦ “Documents Sent from Chinese Delegation Appointed by Dr. Su(n) Yat Sen to Chicherin, Foreign Office” Addressed to Trotzky, Skliansky and Kameneff (October 3, 1923).

⑧ “Meeting of Executive Committee of ECCI” (November 26[or 25?], 1923) における蔣介石の発言。

⑨ 蔣介石「致俄外長齊采林書談本党民族政策」（一九二三年一〇月二六日於莫斯科）、『総統蔣公思想言論総集』巻三六、中国国民党中央委員会党史委員会、台北、一九八四年。

⑩ 中共中央党史研究室第一研究部編訳『連共（布）、共産国際与中国国民革命運動（一九二〇—一九二五）』、北京図書館出版社、北京、一九九七年。

⑪ 蔣介石「与廖仲愷書痛抉党政病根」（一九二四年三月一四日於奉化）、『総統蔣公思想言論総集』巻三六。

蔣介石の日記についてみると、彼自身が書いた原資料[2]と毛思誠が編集したもの（②）がある。③は蔣家からスタンフォード大学のフーバー研究所に寄託されたものであり、そのコピーは研究者に公開されている。②は③の日記の主要部分を忠実に取り入れているが、蔣介石が参観した行事、手紙の往来、学習の内容などの彼の個人的活動を省略している。それに代って②は、③にない蔣介石の旅程、進行しつつある中国の政治・軍事情勢を記録している。したがって、蔣介石の考え方と行動を示す原資料として③を基礎にしながら、それを補完するものとして②を使うことにする。

①の蔣介石「蔣中正致蘇俄党政負責人意見書」（一九二三年八月五日）は、台湾の国史館所蔵の資料であり、日付が一九二三年八月五日となっている。しかし、八月五日前後の蔣介石の日記にはこの文書を完成させたという記述がない。然るに、楊天石氏は毛思誠の日記に依拠しつつ、一九二三年九月一三日に蔣介石が「意見書」を起草したと主張する。[3] 文字と内容が異なるが、それにはいずれも英文で二つの版がある。⑤（ロシア現代歴史文献保管・研究センター所蔵）と⑥（南京中国第二歴史檔案館所蔵）がそれである。④は⑤の中国語訳であり、英文に比べると遺漏が少ない。楊氏は、その内容と蔣介石の日記に基づいて「意見書」が九月一三日に完成したと考え、国史館所蔵資料の「八月五日」の日付はそこの「工作人員」の推測によると断定する。この断定を裏付ける資料は存在しないが、「意見書」の内容から見ると、九月一三日に執筆されたという楊天石氏の観測がより妥当性をもっていると筆者は考えている。

⑩はコミンテルン所蔵の中国関係資料を中国語に翻訳したものであり、蔣介石のソ連訪問中の発言とソ連側の見解が収められている。

一九二三年の蔣介石のソ連訪問について、すでに何人かの研究者が優れた論文を発表している。筆者は、自らの観点との関連で、それらのうちいくつかの注目すべき論文を取り上げる。

第一は、宇野重昭氏の論文である。[4] この論文は、その副題が示す通り、一九二三年のソ連訪問から二六年の中山艦事件に至る間の蔣介石の連ソ政策を扱ったものである。本稿との関連において、この論文は、（一）蔣介石の政治指導の観点からソ連訪問を論じていること、（二）蔣介石の「反共」の程度と構造を論じている点で注目される。本論文では、毛思誠編『民国十五年以前之蔣介石先生』が基礎資料となっている。

宇野氏は、ソ連訪問中に蔣介石が示したソ連軍の在り方・兵器の優秀さに対する関心に注目した。そのような

蔣の根底にあったのは、「軍人的科学主義と紀律重視の精神主義」であった。筆者は、このような蔣介石の「思想」が「代行主義」の政治指導と関連していたと考えている。それは、反共あるいは親共のイデオロギー的立場を超えた蔣のより根源的な思想・態度であった。したがって、蔣の連ソ政策は、彼の根源的要素に従属する「手段的」性質を備えていたと筆者は考えている。

ここから、第二の蔣介石の「反共」の問題が導き出される。宇野氏もソ連から帰国後蔣が反共的態度を示したことを認めている。しかし、国民党と蔣介石が当時置かれていた状況から彼の反共的態度は「第一の優先順位をしめるものではなかった」、と宇野氏は結論づける。筆者はこの指摘は重要であると考える。これらの諸点は新たな資料によってさらに検証されなくてはならない。

つぎに取り上げるのは、王聿均の論文である。[5] この論文が刊行された一九八六年には、現在のように蔣介石の日記もコミンテルンの文書も公開されていなかった。そのような条件のなかで、著者が広く資料を渉猟した努力の跡が見てとれる。この論文も、宇野氏と同じく毛思誠編『民国十五年以前之蔣介石先生』を用いている。

王聿均論文は、蔣介石のソ連訪問の内容を簡潔にまとめている点で優れており、便利である。その項目は、目的、旅程、会見したソ連・コミンテルンの要人、参観と遊歴の地、参加した集会と訪問した組織に及ぶ。特に注目すべきは、訪ソの「目的がその政治・軍事・党務を視察することにあったが、特に重視したのはソ連の軍隊の組織とその長所と短所を見て広州革命政府の建軍の鏡とすることであった」と述べていることである。確かに、蔣介石がソ連滞在中軍事問題に強い関心を示したという著者の指摘は正しい。筆者の観点からすれば、軍事問題への強い関心が彼の代行主義的政治指導とどのように関連していたかがさらに論じられなくてはならない。

王聿均論文でいま一つ注目すべきは、それが蔣介石のソ連滞在中ならびに帰国後の反共的態度、つまりソ連共産党・コミンテルン・中国共産党との矛盾を強調していることである。著者によれば、ソ連に行くまで「彼はロ

シアの共産主義革命に決して反対していたわけではなく、かえって賛成の意を表していた。しかし、ソ連訪問の結果ロシアの共産主義革命は決して成功するとはいえず、そのような革命の方法も中国に適用できない」ということであった。ソ連滞在中に蔣介石がソ連・コミンテルンの指導者やその体制に対して不満・疑問をもった諸事実は確認される。しかし、重要なのは著者がこのような蔣介石の反共的態度の主要な源泉を蔣の『蘇俄在中国』（中央文物供応社、一九五六年）に求めていることである。本書は一九五六年の反共的立場から回顧的に書かれたものである。筆者は蔣介石のソ連・コミンテルン・中共に対する不満を認めつつも、本書で示された彼の反共的態度が当時の蔣の立場を示していたかどうかについて疑問を呈さざるを得ない。つまり、「反共」の質・程度・構造が問題なのである。

第三に取り上げるのは、楊天石氏の論文である。[6] この論文は一九九六年に書かれたものである。それ故に、蔣介石の日記は利用されていない。しかし、資料の面から見た本論文の特徴は、蔣介石がソ連滞在中に提出した「意見書」の草稿（先に言及した資料⑤と⑥に相当する。著者はこれらを「備忘録」と呼んでいる。）を発見し、それらに基づいて彼のソ連訪問を論じていることである。

これらの資料を用いたことは、この論文の第二の特徴と結びついている。「意見書」は、一九二三年九月一三日～一〇月一二日に完成されたが、その最終版は公表されておらず、ここではそこに至るまでの草稿が用いられている。「意見書」は（政治）宣伝と（西北）軍事計画からなるが、後者の部分に重点がおかれていた。それは、国民党軍がソ連の援助を得てモンゴルの「庫倫」（現在のウランバートル）に軍事基地を建設し、北京政権に向けて侵攻する軍事計画であった。著者はこれらの資料に基づいてこの計画を紹介し、そこにソ連訪問の主要目的があったと主張している。

後述するように、この計画はソ連の指導者の反対あるいは消極的態度に直面した。しかし、そのようなソ連の

態度は蔣介石にとって受け入れ難いものであった。西北計画は孫文の意思に基づくものであり、北京の軍閥政権と対峙する広東の国民党政権の立場から導き出されたものであった。蔣介石もこのような状況を背景としてソ連を訪問したのである。さらに、蔣介石の軍人としての立場を考慮すれば、大衆の政治工作より軍事計画を優先する態度は、国民党ならびに蔣介石の代行主義的政治指導を示唆していた。ここに、本論文の第三の特徴がある。

筆者は以上三篇の論文を通して、一九二三年の蔣介石のソ連訪問のもつ問題点を指摘した。蔣介石のソ連訪問について他の著者も優れた論文を発表しているが、いずれも類似の問題を扱っている。筆者はそれらの論文をも考慮しつつ、以下の問題を抽出したいと思う。（一）西北計画、（二）「反共」の諸問題、（三）蔣介石がソ連で見たもの――代行主義との関連、がそれである。筆者は既存の資料と合わせて、近年公開された蔣介石の日記を用いてこれらの問題を論じることにする。

三　西北計画

この問題は、すでに多くの研究者によって取り上げられている。現時点でこの計画それ自体を新たに解釈する資料はない。そこで筆者は既存の研究と資料に基づいてこの問題を取り上げる。筆者が本章で意図するのは、この計画それ自体ならびに計画をめぐるソ連との交渉が蔣介石の政治指導にとって持つ意味を検証することである。

楊天石氏が指摘するように、蔣介石は一九二三年九月一三日から一〇月一二日にかけてソ連に提出する「孫逸仙博士代表団」の「意見書」を作成した。毛思誠によれば、それは、九月一三日の時点で八二〇〇字からなり、そのなかに軍事計画が含まれていた。[7] すでに言及したように、現在「意見書」の存在は確認されていないが、不完全ではあるが、「意見書」にいたる過程の二種類の英文草稿が存在する。二つの英文に欠落部分が多くあるが、

西北計画に関する限り共通部分も多く見られる。そこで筆者は、主として中国語に訳された「中国革命的新前途」を利用しつつ、西北計画の概略を再現する。

西北計画は、広東省に革命根拠地を置く孫文の要請から出発した[8]。「中国革命新前途」によれば、「中国人民は、中国国内軍閥（……）の暴政による苦痛を経験しているだけでなく、外国資本主義と帝国主義列強の圧迫を受けている。」中国が軍閥と帝国主義列強に抑圧されているという認識は、当時の中国の革命指導者のなかに広く存在していたものであり、訪問中のソ連・コミンテルンを意識したものでもあった。

当時の「中国の軍閥と彼らによって組織された北平（北京）政府は、すでに外国資本主義と帝国主義列強に対して降伏してしまった。」したがって、革命の主要な対象は軍閥の支配する北京（政府）にあった。しかるに、「軍事的観点から見ると、われわれ（国民党勢力）はしばらくの間外国資本主義勢力の範囲内にあって東南地区で永久的基礎を固めることができない。」「だからわれわれが希望するのは、友邦であるソ連の国境に近い中国の西北地区で適当な地域を探し、われわれが革命計画を実行し、中国軍閥・外国資本主義・帝国主義列強と闘う軍事基地とすることである。」

これが、蔣介石の、そして国民党の西北計画の目指すところであった。蔣介石は、この計画を実現するための軍事基地の候補として、モンゴルのウランバートルと新疆省のウルムチの二つの地区を提示した。この文書のなかで、ウランバートルとウルムチの二つの地域の軍事基地としての優劣が多様な観点から検討された。国民党と軍閥との勢力の対比、各地域の情勢、軍事目標である北京と軍事基地との距離、基地の地理的環境、必要とされる行軍の時間、国際環境、交通、国民党と軍閥の軍事編成上の兵力・兵器・財政状況の比較などの項目が比較の対象とされた。結論は、ウルムチよりウランバートルが適しているということであり、そのことが提案としてソ連側に提示されることになった。

次の問題は、われわれがこの西北計画を蔣介石のソ連訪問のなかでどのように評価するかということである。この問題を検討するために、三つの論文を取り上げる。呉文律氏[9]は、「蔣（介石）氏がモスクワに行き、西北戦略に対しソ連が支援してくれることを求める戦略的任務」を帯びていた、と述べる。蔣永敬氏[10]も、「蔣中正のモスクワ訪問の最重要任務は、つまり上記の計画（西北計画）を実現するためである。それはまた『西図』であり、あるいは『西北計画』とも呼ばれている」、と述べている。さらに楊天石氏[11]も、「蔣介石なる人物の意見書（国史館所蔵文書―筆者注）の重点は、北京を攻略する重要意義を論証することにあった」と述べ、蔣介石の訪ソにおける西北計画の重要性を強調した。これらの論文に共通するのは、西北計画が蔣介石のソ連訪問の目的のなかで「（最）重要」であったことを指摘していることである。そこで問われなければならないのは、この計画を提示されたソ連側がそれをどのように評価したかである。

西北計画がソ連側に提示されたのは、その記録を見る限り、一九二三年九月九日と一〇月三日であった[12]。九月九日蔣介石率いる代表団は、ソ連革命軍事委員会副主席・スクリヤンスキーと総司令・カーメネフに会見した時、西北計画を提案したが、ソ連側は慎重な態度を示した。ソ連側の記録によると、「スクリヤンスキー同志とカーメネフ同志は、代表団の説明を聞き終った後に、戦役のすべての詳細、目前の軍隊配置、将来の作戦地区の政治状況などを検討してから、書面形式でこの計画について意見を述べることを提案した。」[13]一〇月六日カラハンは、ボロディンに宛てた手紙のなかで、この計画を「孫（文）の北方から進軍する空想的計画」と呼び、「直ちに実施することができない」と述べた[14]。

ソ連側の慎重な、あるいは否定的な態度によって、西北計画はソ連・コミンテルンの正式の会議に持ち出されなかった。一九二三年一一月二六日にモスクワで開催されたコミンテルン執行委員会で蔣介石は積極的に中国革命の情勢を説明したが、西北計画に言及しなかった[15]。この発言のなかで蔣介石は、中国の政治・経済情勢につい

てすでにヴォイチンスキーへの文書のなかで報告したと述べている。この蔣介石の報告書は一〇月一八日付の文書として残っているが、それとても西北計画に全く触れることはなかった。[16] 確かに、後に引用する一一月一一日の日記のなかで蔣介石が表明した「自強」の覚悟は、西北計画をめぐるソ連の消極的態度に対する不満を示唆していたと考えられないことはない。なぜなら、彼はその日の午前中に「意見書」を調べなおし、午後スクリヤンスキーとカーメネフに会っていたからである。しかし、そこで西北計画がどのように取り上げられたかは明らかにされなかった。

西北計画は孫文の意を体したものであり、蔣介石のソ連訪問にあって重要な課題であった。しかし、ソ連・コミンテルンはこの計画が実現不可能と考え、正面から取り上げようとしなかったのである。たとえソ連・コミンテルンが広東の国民党政権に軍事援助を与えたとしても、それはこの計画自体の実現のためではなかった。したがって、西北計画は蔣介石の訪ソのなかで結果的には大きな意味をもっていなかった、というのが筆者の見解である。それでは、この計画を蔣介石の政治指導との関連でどのように位置づけることができるのであろうか。

一九二三年一一月一二日蔣介石がスクリヤンスキーとカーメネフに会見した時、つぎのように述べている。「ロシアでは共産党はただ一つの敵に直面しただけである。つまり、それはツァーリ政府であった。しかし、中国では情況が異なっており、地球上のすべての国の帝国主義者が中国革命に反対している。このような情況下で中国の工作は極めて大きな困難に遭遇した。それ故に、そこでは軍事行動をとることが必要であった」。言うまでもなく、西北計画はこの軍事行動の延長線上にあった。それに対しスクリヤンスキーは、「大衆に近づき、大衆とともにある。これこそが中国革命のスローガンである」と言う。それ故に、「ここ数年はもっぱら政治工作を行うことが必要である。軍事行動の時期は内部の条件が非常に有利になった時、初めて到来する可能性が生じる。あなた方の計画で述べている軍事行動を起こせば、冒険であって初めから失敗を免れない。[17]」

同様の意見の違いは、一九二三年一一月二七日に行われた蔣介石とトロツキーとの会見のなかにも現れた。この時トロツキーは、西北計画を含む国民党側の意見書に通じていた。彼は、そのことを前提として蔣介石一行にその見解を示した。トロツキーは、労働者・農民大衆を重視し、国民党が「すべての注意力を政治工作に集中し、軍事活動を必要最低限度にとどめなくてはならない」と主張した。たとえ軍事行動をとるにしても、「国民党が軍事行動を起こすことができるのは、自国の本土からであって、（西北計画の要求する――筆者注）モンゴルからではない。」[18]

ここに、蔣介石・国民党とソ連・コミンテルンとの政策上の違いが、単純化された形ではあるが、軍事工作と政治工作との対比として示されたことは、注目しなくてはならない。ソ連側は明らかに、自らの領土を割いてまでして中国の国内政治に軍事的に介入することを望まなかった。他方、国民党は広東省に政権を樹立したものの、自らの軍事力を持たず、弱体な大衆的基盤の上に立って、北京政権と軍事的に対抗しなくてはならない立場に置かれていた。その意味で、ソ連の軍事力への依存は魅力的であった。

このことを蔣介石の政治指導に引き戻して考えてみる。すでに指摘したように、代行主義的政治指導において指導部の権力維持が前提となっていた。軍事力はそのための手段であり、特に軍人である蔣介石にとって重要であった。したがって、西北計画を通して軍事工作の重要性を強調したことは、当時の国民党政権が置かれていた状況からの要請であるとともに、蔣介石の代行主義的政治指導の特徴をも示していた。

このような軍事力への依存の根底には、蔣介石の自己の力に対する信仰があった。つまりそれは、自らを物理的にも道徳的にも強化することが政治指導力の源泉であるという「自強」の論理である。一九二三年一一月一一日の日記に曰く。「個人のためであれ、国家のためであれ、人に頼るより自分に頼ったほうがよい。親友や同志がいかに親しくても、それは結局自分の利害に他ならない。然るに、自身の基礎がどうであれ、みな軽く見るわ

けにはいかない。成功しようとすれば、自ら事を始めなくてはならない。外部の力はもっとも頼りにならないものである。」これこそが、蔣介石の思考と行動の基礎であった。

そこで、この計画がソ連側に提示された九月九日と一〇月三日の日記のなかで蔣介石が示した態度を見ることにする。九月九日蔣介石は、「東方局長」ヴォイチンスキーを訪問し、午後「陸軍次長」スクリヤンスキーと「参謀長」カーメネフを尋ねた。スクリヤンスキーとは中国情勢について三時間余検討したが、その人柄は「和やかで親しみやすかった」。カーメネフもまた「熱心に私を助けてくれた」。「ロシアの人民は地位に関係なくわが国の人民に比べて誠実で丁寧であり、うらやましく思う」という感想を蔣は日記に記録していた。

また、ソ連側の文書[19]では一〇月三日チチェーリン・トロツキー・スクリヤンスキーに「中国軍事行動草案」が手渡されたことになっているが、誰がそれを受け取ったのか明示されておらず、蔣介石がこの文書についてソ連の指導者と話し合った記録もない。一〇月三日の彼の日記を見ると、「手紙の原稿及び意見書のために友人と討議するが、いささか意見の違いが生じた」とあり、午後には「客に会う」という記録がある。しかし、「友人」と「客」の名前は特定できない。彼の日記の書き方に従えば、もし上記三名のソ連の指導者に会っているとすればその名前は記録されている。要するに、軍事計画書がソ連側の指導者に提出されたが、その計画が中ソ間で議論されたことは確認できないのである。

しかし、蔣介石の日記を見る限り、「意見書」の原稿及び関連文書を検討・送付した記録が多数ある。その記述は、九月四日、一〇日、一一日、一二日、一三日、一〇月六日、一二日、一一月一一日の日記のなかにある。言うまでもなく、「意見書」には西北計画が含まれていたと考えられる。ソ連滞在中蔣介石は、多くのソ連の指導者と会見し、彼らに書簡や報告書を送っている。その過程で西北計画が議論の対象になったことは十分ありうることである。しかし、この計画が実現しなかったことに対する蔣介石の態度は十分に読み取ることができない。

このような蔣介石の状態を彼のソ連訪問のなかでどのように説明できるのであろうか。この計画が実現できなかったという意味において、彼にとってそれは「挫折」であった。ここで確実に言えるのは、蔣介石が西北計画の「挫折」によってソ連訪問の成果を全面的に否定しなかったことである。この問題の解決には交渉が必要であり、結論が直ちに出るものではなく、またその必要もなかった。むしろ蔣介石はソ連滞在中その他の局面においてソ連・コミンテルンに違和感をもっていた。その意味で、西北計画の「挫折」はその他の局面と関連づけて評価しなければならない。そのことは、彼のソ連に対する不信感とそれに伴う「反共」の問題と結びついていたのである。

四　蔣介石のソ連訪問と「反共」の諸問題

蔣介石は後年いろいろな機会に一九二三年のソ連訪問を回顧し、論評した。すでに多くの研究者によって引用されているが、帰国直後の一九二四年三月一四日蔣介石は廖仲愷に書簡を送った。[20] この書簡は当時の国民党政治の欠陥を批判したものであり、ソ連批判のために書かれたものではないが、国民党批判の一環としてソ連に言及している。この書簡はまた、私信の形をとりながら、国民党の各常務委員に配布され、「ロシア訪問の報告を補うものであった。[21]」したがって、それは当時の蔣介石の政治的立場を表明した公的性格をもつものでもあった。

蔣介石はこの書簡でロシア（ソ連）政府と共産党に対する不信感を表明した。「ロシア共産党の中国に対する唯一の方針は、中国共産党を正統な地位につけ、お互いに成功するためにわが党と終始合作できるとは決して信じていないことである。」彼は、ソ連の中国に対する外交政策にも警戒心を示した。「その中国に対する政策は、満・蒙・回・藏の諸部族についてみれば、みなソヴィエトの一部であり、中国本土に対しても手出しする意思がない

わけではない。」

この書簡が出されたのはちょうど国共合作が成立した直後のことであり、蔣介石は中国にいる中国共産党員に対する直接的批判を控えている。彼の中共に対する不満は、ソ連にいる中共党員への批判のなかで表明された。「中国人はただ外国人を崇拝し、自国の人間の人格を否定している。ロシアに滞在している中国共産党員のごときは、ただ他人をアメリカの奴隷、イギリスの奴隷、日本の奴隷と罵っているが、自らはすでに全くロシアの奴隷になっていることがわからないでいる。」蔣介石はこのようなソ連・中共に対する不満ゆえに、廖仲愷に対して「事実と主義を区別しなければならず、われわれはその主義ゆえに信じ、事実を顧みないわけにはいかない」と説いていたのである。

ここにおいて、蔣介石のソ連・中共に対する不満の根源が、①ロシア共産党の目的は中共を中国革命の正統な地位につけることであって、国民党との長期的合作を目指していない、②ソ連は、満・蒙・回・藏の諸民族を自国内に取り込もうとしていること、③ソ連にいる中国共産党員の振る舞いにあったことが確認される。

さらに、蔣介石は一九五六年に書いた『蘇俄在中国』[22]のなかで、当時の反共的立場からこの一九二三年のソ連訪問の経験に言及した。「コミンテルンの中国共産党に関する決議を見せてもらったが、それは中国の国民革命について正確な認識を欠き、中国社会を無理に分けて階級闘争を提唱したもの」であった。蔣の不満は階級対立を強調するコミンテルンの政策に向けられた。

ソ連の政府とソ連共産党に関して蔣介石は、「ソビエトの政治組織が専制かつ恐怖的なものであり、国民党の三民主義政治制度とはとうてい相容れないものだということを改めて認識した」と述べている。彼はまた民族的利益の問題でソ連政府との間で対立した。「私はソ連共産党や政府の責任者たちと外蒙古の問題について語り合ったとき、彼らが外蒙古侵略の野心を絶対に放棄していないことを立ちどころに見抜いたのである。」

中共に対する不満は、共産党が「わが党に対して用いた切崩し、離間、挑発などの手段」のなかに見出された。訪ソの「メンバー四人のうち三人が国民党員で、張太雷だけが共産分子であった。しかし一行がソ連に着くと、張太雷はさっそく切崩し工作にかかり、まず沈定一を抱きこんでわれわれ二人と対立した。」

「私が訪ソ三ヵ月にうけた印象を一言にしていえば、……それはソ連の共産党政権がひとたび強固な存在になった暁には、ツァーリ時代の野心の復活する可能性があり、したがってそれが将来わが国とわが国民革命に与える禍ははかり知れないものがあろうということであった。」このような蔣介石のソ連に対する批判と猜疑心の背後には、コミンテルン・ソ連・中共に対する反共的立場が三位一体のものとして存在していたのである。

この著作のなかでみると、蔣介石のソ連・中共に対する不満の根源が、①～③に加えて、④コミンテルンの中国問題決議の不正確な中国の情勢認識、その一環としての階級闘争の強調、⑤ソ連の政治体制の専制的性格、⑥代表団のなかにおける中共との対立にあったことがわかる。蔣介石の立場は、一九二四年と一九五六年とでは異なる。しかし、われわれは異なった状況で表明されたこれらの蔣介石の「反共」的立場の論点を一九二三年当時の文献[23]と状況のなかに差し戻し、蔣介石のソ連訪問のなかでどのような意味をもっていたかを検討しなければならない。

第一の論点は、ソ連（共産党）・コミンテルンの中国革命・国民党との合作に対する不信感である。蔣介石は、この不信がどのような具体的事実に基づいているのかを説明していない。それは、一面では一九二三年のソ連訪問中蔣介石がソ連・コミンテルンとの接触のなかで経験した対立点から来るものであり、他面では長年にわたるソ連・コミンテルン・中共との対立の結果蔣介石が一九五六年時点で得た全般的な感情であった。彼の不信感の源泉として、より具体的な対立点が解明されなくてはならない。

第二の少数民族地区、特にモンゴルをめぐる問題は蔣介石とソ連との重要な対立点の一つであった。すでに述

べたように、西北計画はモンゴルの地位と地政学的有用性に触れる微妙な問題を含んでいた。

蔣介石は、一九二三年一〇月一九日の日記のなかで、外務人民委員「チチェーリンに出す手紙文」を検討したことを記している。彼はまた、一〇月二一日にチチェーリンを訪ね、「モンゴル自治問題及び根本計画」について語った。これらの準備を踏まえて、蔣介石は一〇月二六日チチェーリンに書簡を送ったことが確認されている。[24]

そこで、この書簡のなかに対立点を探ってみる。その発端は一〇月二一日（日記）に行われたと思われる両者の会談のなかにあった。蔣介石は、その折にチチェーリンが『モンゴル人が中国人を恐れている』と発言したことに対して説明を求めた。蔣によると、「モンゴル人が恐れているのは、現在の中国の北京政府の軍閥であって、決して民族主義を主張する国民党を恐れているのではない。」国民党は、「自治の方向にむけて相互の親愛協力の目的」を達成しようとしている。したがって、「国民党の主張する民族主義は各民族の分立（分離独立――筆者注）を説くものではない。」「西北問題は、まさに国民党がやろうとする工作の真の意図を内包している」のである。蔣介石にとって、「モンゴル人が中国人を恐れている」という見解を喧伝することは、当時の中国人が考えていたモンゴルと一体化した伝統的アイデンティティからの「分立」を意味した。ここに、モンゴルをめぐる蔣介石とソ連との対立点があった。

第三のソ連にいる中国共産党員に向けられた批判は、モスクワ滞在中の中国人学生たちに対する不快感のなかで確認される。一九二三年一〇月一〇日、双十節に因んで蔣介石は自らの宿にモスクワ在住の中国人留学生を集め、革命党の歴史について講演した。講演自体は順調に進み、彼自身も満足したようである。しかし、翌一〇月一一日に「昨日の演説には個人崇拝の弊害があり、中国人の尊大さをあざ笑っている。また、外国人の支配を望み、国内の英雄を尊ばないことを願っている」と言う人がいるということが彼の耳に入った。「だから青年たちは言うだけで実行できず、結果を出すことができないのである」。青年たちに「個人崇拝」と受け取られたのは、

蔣介石が中国革命における孫文の役割を強調した結果であると思われる。これらの青年たちがすべて共産党員であったとは断言できないが、ソ連に留学してその影響を受けており、国民党に対して批判的態度をもっていたことは確認できる。その意味で、蔣介石にとって彼らは「共産党員」であった。ソ連滞在中蔣介石がこれら学生たち以外に中国共産党員と接触した可能性は十分あるが、日記のなかで彼らに対する蔣の不快の念は確認されない。

第四のコミンテルン執行委員会の中国問題に関する決議[25]をめぐる問題を検討する。この決議は一九二三年一一月二八日に採択された。決議の採択に先立って一一月二五日に開かれたコミンテルン執行委員会では、国民党の五人の代表とコミンテルン代表が一緒になって、（一）コミンテルンに対する国民党の態度について意見を聴取すること、および（二）国民党とともに決議を起草するために、ブハーリン、コラロフ、クーシネン、アムテル、ヴォイチンスキーからなる委員会を組織することをきめた[26]。先に言及したように、蔣介石はこの会議で積極的に中国の立場を説明し、コミンテルンの指導者と意見を交換した記録が残っている[27]。これらの記録の日付は一一月二六日となっているが、注27の英訳原稿は一一月二五日となっており、蔣介石の日記のなかでも一一月二五日であったことが確認される。

一九二三年一一月二五日蔣介石はコミンテルン極東部長・ヴォイチンスキーに何回も面会を約束したにもかかわらず、それが実現しないために苛立たしく思っていた。「夜七時になって会議が開かれ、ジノヴィエフ議長以下各国の共産党主席が皆出席し、雰囲気はすこぶる良かった。今日の自分の演説も一番落ち着いたものであり、まとまりが良かった。」（一一月二五日の日記）然るに、一一月二八日にコミンテルンの中国問題決議が採択された。蔣介石によると、「午前中文献を点検する。コミンテルンのわが党に対する決議文を調べると、抽象的で実情にあわず、自らを世界革命の中心に位置づけているのは傲慢であり、現実から浮き上っている」（一一月二八日の日記）。

蔣介石はなぜ決議が「実情にあわない」と感じたのであろうか。そこで、すでに言及した一一月二八日のコミンテルン執行委員会決議（「決議」）とその前段の一一月二五日のコミンテルン執行委員会における討論（「討論」）のなかに、蔣介石が違和感を持ったと思われる問題点を探ってみる。

「決議」の第一に注目すべき点は、軍事行動の問題である。「決議」は、中国革命成功のために「広範な宣伝と組織工作によって彼ら（大衆）と最も密接な関係を維持しなくてはならない」ことを強調した。国民党が封建主義反対闘争を徹底できない主要な原因は「自らの計画を軍事上勝利した、すでに世界帝国主義の道具となってしまったあのような国内の反動勢力に託してしまったこと」にあった。この部分は、大衆に対する宣伝と組織工作の重要性を強調し、軍事行動・軍閥に依存するものとして国民党を批判するコミンテルンの姿勢を示唆していた。それは、西北計画のなかで軍事行動重視の立場をとった蔣介石との違いを意味した。したがって、蔣介石は「討論」のなかでこの論点に言及することはなかったのである。

コミンテルン決議に対して蔣介石が感じた違和感の第二の問題点は、民族主義に関するものであった。「決議」は言う。「国民党は国内各民族自決の原則を公然と提出しなければならない。そうすることによって外国帝国主義・本国の封建主義の軍閥制度に反対する中国革命のなかで勝利を得た後に、この原則が以前の中華帝国の各民族からなる中華連邦共和国のなかで実現できるのである。」これは、一九二〇年七月のコミンテルン第二回大会で採択されたレーニン主義的民族主義理論の延長線上にあった。つまりそれは、帝国主義支配からの解放過程における諸民族の分離独立の自由と、独立達成後の自由な結合を説いたものであった。しかし、西北計画のなかで言及したように、この原則は中国の伝統的アイデンティティの枠組みのなかで微妙な位置を占めるモンゴルの分離独立の可能性に触れるものであった。それ故に、蔣介石は「討論」のなかでこの問題に言及しなかったのである。

第三の問題点は、中国革命におけるプロレタリアートと共産党の役割に関するものである。蔣介石は「討論」

のなかで、三民主義の第三の原則である「民生主義は共産主義に向う第一歩である」と述べた。「中国革命の第一段階、つまり中国民族主義革命を三年、五年と行った後、われわれは成功することができ、ひとたび成功すれば、われわれは第二段階を開始する。つまり、共産主義のスローガンの下に宣伝を展開するのである。」

蔣介石はこのように表面的には共産主義に歩み寄る姿勢を示した。しかし、彼の本来の意図は国民党の主導する中国革命がコミンテルンの唱導する革命と異なることを主張することにあった。「国民党は中国で革命工作を行う責任を負っており、……中国の革命政党はつまり国民党である」。「現在われわれがプロレタリア階級の革命を始めることができないのには二つの要因がある。一つは大多数の中国人が字を読めず、それ故に人民のなかで宣伝工作を行うことが特に難しいからである。」「第二の原因は、大多数の中国人民は小農階級、小ブルジョアジーに属しているからである。」ここに現れた蔣介石の立場は、プロレタリアートの主導を排し、小農階級・小ブルジョアジーも参加できる中国革命を主張することであり、それを指導するのは国民党であるということであった。

コミンテルンも「決議」のなかで「民族政党である国民党が指導する中国の解放運動」を承認した。しかし、「決議」を見るとその意図は国民党の指導権を認めることではなく、革命運動におけるプロレタリアート・共産党の地位を強化することにあったことがわかる。「現在、中国労働者階級は全国各地区……で経済上と政治上で利益が一致する唯一の階級である」。「革命政党国民党は中国労働者の運動が日増しに発展している情況をさらに考慮し、全国的解放運動を強化するために労働者階級の力を大胆に立ち上がらせ、彼らの経済組織及びその階級的組織――中国共産党を全力をあげて支持することを、コミンテルンは信じている。」このような主張は、蔣介石がソ連・中共に対する不満の根源の第一に指摘した、ソ連・中共が国民党を乗っ取るのではないかという不安を刺激したことは間違いない。

蔣介石は、ソ連・中共に対する不満の根源として第五に指摘したソ連の政治体制の「専制的性格」に直接言及したことはなかった。彼は、ソ連滞在中にソ連共産党の支配、党の紀律、革命直後の緊張したソ連社会を直接見ることがあったにしても、そのことをソ連の政治体制の「専制的性格」と結びつけて考えることはなかった。しかし、「討論」のなかで蔣介石は、ソ連の政治体制が三民主義の政治制度と相容れないとも言う。彼がそう考えたとしても、一九二三年当時の国民党はまさに革命運動における党・軍の指導を強化しようとしていた。その意味においても、蔣はソ連共産党の支配を「専制的」と断ずる立場にはなかった。したがって、筆者は、蔣介石のこのような観点は長年にわたる反共闘争の末に到達した彼の見解であると考えている。

注目すべきは、蔣介石のソ連の政治体制に対する不満がその体制を支える人材の評価のなかに現れていたことである。彼の日記を見る限り、ソ連・コミンテルンの指導者に対する批判は、皆無ではないが、抑制されたものであった。むしろ、そこにはソ連・コミンテルンの指導者に対する肯定的評価が多く見出される。

すでに言及した、スクリヤンスキー・カーメネフに対する好意的評価はその一例である（九月九日の日記）。蔣介石はまた、最初の会見の時のヴォイチンスキーの「真心のこもった」態度に好感を示し（九月三日）、チチェーリンとも「話はすこぶる誠意があり、……互いに意気投合した」（九月五日）と述べた。その他に彼は、ソヴィエト議長のカリーニンに会った時、その素朴な農民的雰囲気に好意を示した（一一月一六日）。しかし、それ以上に注目すべきは、ソ連滞在中の蔣介石とマーリンとの接触である。日記で確認する限り、彼らは一〇回会っている。一〇月二二日蔣介石は代表団内部の人間関係に悩んだ時、マーリンにソ連に留まるべきか、去るべきかを相談した（一〇月二二日）。以上の例からわかるように、蔣介石のソ連・コミンテルンの指導者との関係は初めから悪いわけではなかった。しかし、滞在中の接触を通じて彼が不快の念を経験することもあった。

一九二三年一〇月一八日蔣介石はチチェーリンに会いに行く約束をしていたが、その時になってチチェーリン

が病気であるとの理由で会見が実現しなかった。この事態は蔣にとって不都合なことであるが、彼はそれ以上に不快の念を示さなかった。

一一月二五日の日記に曰く。「コミンテルン極東部長ヴォイチンスキーは私に主席団に会わせることを約束したが、再三延期し、偉そうにしているが、自分としては必ずしも会見を望んでいるわけではない。」再三約束を破りながら、「今日に至るもまだ時間を決めて会うことができないことに対しては怒りこの上なく、婉曲に会見を断ったが、彼はまたやって来て会いにくるように求めたので、やむを得ず同意した。」ヴォイチンスキーとの会見をめぐる蔣介石の苛立ちは隠しえなかった。間接的ではあるが、ソ連側の資料も蔣介石のこのような不満を伝えている。[28] カラハンによると、蔣介石はソ連と北京政府との交渉に大きな不安を抱いていた。蔣介石は「ひどく神経過敏になっており、彼はわれわれ（ソ連指導者）の眼中にないと思い込んでいた」のである。

蔣介石は、到着後とは異なりソ連滞在の時間が長くなるにつれ、ソ連指導者との間にこのような「苛立ち」を経験したとしても、そのことが直ちに「反共」に転ずる契機とならなかったことは上述した通りである。彼はむしろ、ソ連の官僚層に強い不満を示した。

蔣介石は、ソ連の「外交部員が礼を失し、怠慢であることを不快に思い、何度も帰国したいと思った」と記している（九月二四日）。「今日（一〇月二日）また、外交部の小役人のいんちきに対して怒りを感じた。それは自分の志があまりにも堅くないからであった。」（一〇月二日）「ソ連共産党の下級人員はわが中国に比較してもさらに悪い。実にこれはロシア共産党の心配の種である」（一〇月一一日）。

蔣介石は、ソ連滞在中ソ連の党・国家の官僚層と接触する多くの機会をもった。党・国家の最高指導層の人々に対する態度と比較すると、彼は官僚層に対してははるかに厳しい言葉でもって不快感を表した。そのことは、ソ連における党・国家の支配に対する不信感と結びつくことになった。この感情は、後年の反共闘争を通して一

層強化された。

蔣介石がソ連滞在中人間関係で悩まされたより深刻な問題は、国民党代表団内部の対立であった。この問題は、彼のソ連・中共に対する第六の不満の根源であった。蔣介石は、張太雷・沈定一・王登雲の代表団団員及びその他のモスクワに滞在する中国人との付き合い方に心を痛めたようである。

蔣介石にとって信頼すべき中国人がいなかったわけではない。ドイツにいた邵元冲は、一九二三年一一月四日から二八日までモスクワにいる蔣介石を訪れた。蔣は邵元冲と「代表団の扱い方について相談し」（一一月四日）、「盟友であることを誓い合った」（一一月一六日）。また、モスクワで会った趙世賢は「若い有為の士」（一一月一八日）であり、蔣は彼に対して、「この度のソ連訪問の経過と情況について」話し、あわせて「外国人に支配されないように努める」ことを伝えた（一一月二八日）。

これら信頼すべき二人の中国人との接触からわかるように、蔣介石が心を痛めたのは訪ソ代表団におけるソ連・中共の影響であった。蔣介石は日記のなかでその名前に言及することはなかったが、そこでは共産党員である張太雷・中共に傾きつつある沈定一と蔣介石・王登雲との対立が存在していた。「本党の団体の現状と同志の心の貧困さにはがっかりさせられるばかりでなく、人生も全く面白くない」（九月一八日）。これ以外にも、彼は日記のなかで度々「交友」関係の難しさに言及した（一〇月三日、一〇月五日、一〇月二二日）。彼は「交友」の相手を特定しなかった。しかし、その時まわりに居たのは、「手紙の原稿と意見書」について議論した「友人」、「仲間」であり、「同志」であった。ここで言及された人々は、明らかにソ連・コミンテルンの指導者ではなく、国民党代表団員を含む中国人を示唆していた。

以上において筆者は、後年蔣介石が反共的立場からソ連訪問時にソ連・コミンテルン・中国共産党に対して表明した不信感の六つの根源を、当時の状況のなかで検討した。彼が、中国革命における国民党の指導権に対する

ソ連・中共の挑戦、モンゴルの帰属をめぐる国民党とソ連との意見の対立、ソ連における中国共産党員の振舞いと国民党代表団内部における対立、コミンテルン決議における軍事工作と政治工作の重点の置き方の違い、及びソ連の指導層と官僚層に対する不快の念を抱いていたことが確認された。しかし、当時蔣介石が反共一辺倒でなかったことも明らかであった。彼のソ連指導者に対する評価と感情は決して全面的に悪いものではなかった。特に、マーリンとの接触は密接であり、ヨッフェ夫人との交流も日記のなかに見出される（一一月二九日）。したがって、彼はソ連・コミンテルン・中共全体と対立していたわけではなかった。モンゴル問題は微妙で政治的には困難な問題を内包していたが、そのために国民党とソ連との関係が断絶するには至らなかった。その限りにおいて、蔣介石は「反共」であったが、それは後年彼が表明した全面的で敵対的な反共とは異なるものであった。蔣介石のこの「反共」的態度はソ連社会主義の動態に対する彼の評価と関連していた。

五　蔣介石が見たソ連社会主義

蔣介石が一九二三年当時のソ連社会主義のなかに見出した特徴は、彼自身が中国で抱えていた問題と密接に関係していた。そうであるとすれば、ソ連社会を見る前提として彼が抱えていた問題とは何であったのか。中国の現状に対する不満、ロシア革命の成功から学ぶこと、西北計画のような現実の交渉事項、より長期的に設定された代行主義的指導様式などの諸問題が考慮されなくてはならない。

蔣介石は、中国が帝国主義・資本主義・軍閥に支配されているという見解を度々表明した。彼は、一九二三年八月一六日上海を出発し、船と列車で八月二五日国境地帯の満洲里に至る。この間、蔣介石は列強支配下の中国の現状を見ることになる。八月一八日青島に到着して「港湾を見ると汚れており、秩序が乱れていた。中国人に

ついて見ると、少数の苦力以外に警察や港湾の役人は見当たらず、（この）自由港を管理する人間は誰もいないようであった」。八月一九日大連に到着し、観光に出かけると「すべてが日本式の小横浜」であった。八月二〇日大連から長春に来たが、途中「見聞するものはすべて日本の影響を受け、日本の国境のなかに入ったようなものであった。」このように蔣介石は、日本の支配下にある東北の諸都市の窮状を見た。その情景は革命後のソ連と好対照をなすものであった。

蔣介石の日記を見ると、彼のソ連訪問の重要な目的の一つがロシア革命勝利の要因を見極めることにあったことがわかる。彼はモスクワ到着直後の一九二三年九月七日にソ連共産党「秘書長」のラズダクに会い、ロシア革命成功の経験を聞く機会を得た。蔣介石の理解によると、革命成功の要因として、「①労働者が革命の必要を知っていたこと、②農民が共産を求めたこと、③ロシアは一五〇の民族自治を認め、連邦制を達成した」ことであった。しかし、そこには欠点もあった。「①工場を没収後管理する人間がいなかったこと、②過度の中央集権化があり、小工場は（大工場と）同じように国有にすべきではないこと、③分配上の困難」がそれである。さらに、ソ連の現在の建設状況についても説明があった。「①児童の教育が良く整っていること、②労働者はすべて軍隊教育を受けていること、③小工場を個人に貸与していること」の諸項目が記録されている。

蔣介石はラズダクの話を通して、ロシア革命における労働者・農民の役割、民族自治と連邦制、労働者の軍事教育と児童の教育に注目した。彼の見解のなかには、当時のソ連の状況も反映されていた。つまり、この時期のソ連は戦時共産主義から新経済政策への過渡期にあった。彼はこの側面から、過度の中央集権化からの後退の現象を見てとった。そのことは、階級闘争を否定する蔣介石の立場、さらには国民党の立場にも合致するものでもあった。但し、このときの会話のなかで革命における軍隊の役割は論じられなかった。

以上のロシア革命の経験を踏まえて、蔣介石はソ連社会をいろいろな側面から観察した。最初に取り上げるの

は、ソ連社会の組織と運営に関する彼の見方である。蔣介石は、共産党の支配するいろいろな組織を訪れ、その整備された組織と運営に強い印象を受けた。彼は、一九二三年一〇月二九日モスクワにある電球工場と発電所を見学した。労働者の余暇の学習のために、専門の教師のいる労働者クラブ・学習と音楽の補習室が設けられていたこと、消費協同組合・図書室・新聞閲覧室・食事室・劇場が備わっており、「労働組合と少年共産党部が最も重要である」ことがわかった。

蔣介石は、一九二三年一〇月八日観劇の際、「教育総長」ルナチャルスキーが現れ、舞台で宣伝文書が配布されるのを見て、これが「共産主義の特色」であると思った。彼はまた、共産党中央委員会で報告を聞いて（一一月一日）、正式の党の活動を直接見ることができた。さらに蔣介石は、モスクワに到着するやいなや二二万人の参加する「社会党の大衆運動」に遭遇し、その「盛り上がり」に強い印象を受けた（九月二日）。そのほかに、彼は陸軍学校の卒業記念のデモをも参観した（九月一六日）。

ソ連社会の運営を理解するためには、基層社会の観察も必要であった。一九二三年一〇月三〇日蔣介石はモスクワ近郊の農村ソヴィエトを訪問した。彼は、消費協同組合・小学校訪問時の印象を記録しているが、小学校における日用生活品・教材の自給体制に興味を示した。ここの自治会の「制度は（中国と）同じではなく」、「いかんせんわが国の教育方法は古すぎる」。また、司法・行政・立法・警察権限がこのソヴィエト組織に集中していたことに、蔣介石は関心を示した。

一九二三年一一月六日蔣介石はモスクワ市ソヴィエトを訪問し、革命記念の祝賀会でカーメネフらの演説を聞いた。彼はまた一一月一九日モスクワ（市）ソヴィエト大会を参観した。蔣は、そこでソヴィエトの過去一年の活動実績の報告を聞き、工業生産の回復、労働者住宅の建設、労働者に対する失業手当の支給を「重要な」成果として記録している。

このように蔣介石は、ソ連の社会と組織の運営に接する過程で、社会の行き届いた組織化、共産党の活動と支配の浸透、都市と農村におけるソヴィエトの動態と労働者・農民の福祉、新経済体制の下における生産力の回復に注目した。彼はこれらの諸側面をロシア革命成功の要因と結びつけ、ソ連における権力の浸透・集中・強化の現象を見出したのである。

先に言及したソ連の官僚層に対する不満とあわせて考えると、ソ連社会のすべての側面が蔣介石の期待を満足させてくれるものではなかった。彼は、一九二三年九月二六日から一〇月二日までペトログラードを訪問した。「この間ペトログラードを六日間まわってきたが、市の状況は落ちぶれており、すべてがモスクワの賑わいには及ばなかった。そして、その海軍要員の気風はさらに良くない。それはソ連にとって非常に憂慮すべきことであった。」

蔣介石はこのようにソ連社会の停滞的側面を見なかったわけではない。しかし、この時期の彼の日記を見る限り、ここで得た印象が後年彼が述べたような反共の起源になったという形跡はない。筆者は、蔣介石のこのような体験は当時の国民党とソ連との協力の枠組みのなかにあったものとして捉えている。

次に取り上げるのは、中国革命における軍事行動の重要性の問題である。すでに言及したように、これは国民党とソ連との間に横たわる論争点の一つであった。そこで、ソ連社会主義の動態のなかで蔣介石が見た軍事的側面を検討する。彼は、モスクワとペトログラード滞在中ソ連軍の活動のいろいろな側面を観察する機会を得た。ソ連側も、蔣の関心に対応していろいろな軍の施設を開放した。

蔣介石は、ソ連軍の成功の要因の一つとして、軍の組織、特に政治委員制度に注目した。彼は、一九二三年九月一一日「教練総監」ペトロフスキーを訪ね、ソ連軍の組織について話を聞いた。「各団には党が派遣した政治委員が常駐し、団のなかの主要任務に参加する。すべて命令はその署名を経てはじめて有効になる。」共産党員は軍中にあって組織的に活動する。このような軍の組織は軍の在り方にも影響した。九月一七日歩兵第一一四師

団を参観した時、「その軍紀と整頓の具合はかつての日本の軍隊には及ばないが、上下の親愛の情は自然に生まれてきて、押しつけの気風は全くなく、また政党代表とその団長との間に対立も見られなかった。」

党が軍を指導する政治委員制度は、革命軍の特徴として蔣介石の注意をひいた。それは、やがて一九二四年に改組後の国民党軍に党代表制度として導入された。この制度は、ソ連軍のなかで党・軍関係、軍隊内の上下関係の円滑化に役立ち、一定の軍紀を維持することを可能にしたと考えられた。

軍隊との関連で、蔣介石はソ連における兵器の発達に関心を示した。彼は、一九二三年九月二〇日モスクワで毒ガスを研究している軍化学学校を訪れた。蔣介石はまた、九月二二日に高級射撃学校を参観した時、陳列されている兵器に強い印象を受けた。「ロシアの武器の研究と進歩は欧米各国に匹敵し、わが国のおくれとは比べものにならない。」九月二七日ペトログラードで海軍大学と海軍学校を訪問した時、天文学・物理学の設備が非常によく整備されており、軍関連の図書・公文書も整理されていることを彼は発見した。その他に蔣介石は、ペトログラード滞在中の九月二八日海軍博物館を参観し、ピョートル大帝以来当時までの海軍史上の出来事と品物・人物・艦船の模型の陳列について記録に残している。同日彼はペトログラードの軍港を見、潜水艦建造のための機器を参観するとともに、翌二九日にはクロンシュタット軍港を視察し、潜水艦を見学したのである。

一九二三年一一月七日蔣介石はモスクワの赤の広場で革命記念日の軍事行進を見る機会を得た。当日の感想を彼は、「ロシアの軍備の進歩は明らかであり、軍隊の態度もすこぶる堂々としている。今日の動きをみると、ソヴィエト政府が人民に対しすでに基礎をもっていることがわかる」と述べている。

以上の日記の記述からわかるように、蔣介石はソ連の軍隊の組織、制度、士気、軍備、軍事産業、軍事施設、軍関連の学校、軍事史の資料など、軍の多様な側面に興味を示した。彼は、ロシア革命の成功と中国の現状に鑑み、ソ連の軍隊のいずれの側面をも積極的に評価した。この態度は、蔣がソ連指導部との接触のなかで政治工作

より軍事工作を重視していたこと、および代行主義の政治指導において軍事が重要な位置を占めていることに対応していた。

蔣介石は、軍事に加えて、ソ連社会を担う人材の質にも関心を示してきた。そのなかには、最高指導者・官僚・軍人・労働者・農民が含まれている。この問題は教育に関係していた。しかし、蔣介石の教育問題に関する言及は多くはない。

一九二三年九月一一日蔣介石は「教練総監」ペトロフスキーと会談し、「各種学校教程」をもらった。それらは軍関係の学校のものと思われるが、その内容についての説明はない。彼はまた、一一月四日の日記のなかで次のように述べる。「ソ連の各地にはすべて共産党支部があり、青年に対して極力育成に努め、重視していることは、その最も優れた政策である。」青年の教育に対する党の指導がここで確認された。さらに蔣介石は、一一月二一日に「教育総長」ルナチャルスキーに会い、そこで聞いたソ連の教育方針の特徴として以下の七点を記録している。①宗教の廃止、②男女共学、③実際生活との近接、④学生による学校の管理、⑤教育制度の統一、⑥労働者学校の重視、⑦専門の学問であった。

以上の例は多くはないが、蔣介石の教育に対する関心の所在を指摘することができる。第一は青年の教育の重要性であり、第二は教育に対する党の指導と国家による統一であり、第三は、宗教の廃止・学生の学校管理・労働者学校の重視などからなる教育面に現れた社会主義的要素であった。第三の、社会主義によって生み出された事物を蔣介石がどこまで支持したかは明らかでない。しかし、第一と第二の青年の教育に対する党・国家の指導性の指摘は、中国革命の推進と強い中国の創出を目指す蔣介石の立場によっても支持されるものであった。しかし、留意すべきは、彼が教育の自由に言及していないことであった。

ソ連滞在中の蔣介石に影響を与えた要素として最後に取り上げるべきは、風景・歴史・生活に対する彼の印象

である。この種の印象が直接彼の政治的立場に影響を与えたとは考えられない。しかし、そこで得た印象は蔣介石のソ連に対する全般的態度に間接的に影響を与えることになる。

蔣介石は日記のなかでたびたびソ連の風景・歴史・生活に言及した。それらすべてを取り上げる必要もないので、二、三の例を通して検討することにする。モスクワに到着する前にチタ、バイカル湖を通過した時、彼はその景色に魅せられた。チタにくるまでの「途中は風光明媚であり、森林が深かった」。「バイカル湖は果てしなく広く、風と波は海のようで、まことに素晴らしい景色であった。」（一九二三年八月二六日、二七日）蔣介石はモスクワの風景も気に入っていた。モスクワ上空で飛行機からみた月は美しく、空気は清浄であった（九月二四日）。彼はまた、好んでモスクワ河のほとりを散歩し、船に乗って西南隅にある「不寂の園」に遊ぶこともたびたびあった。その地はモスクワの一番高い所にあり、「モスクワ第一の景勝地であった。」それは、「東京の上野公園に似ているが、風景は上野に勝るものであった。」（一〇月一三日、一四日）このように蔣介石はソ連の美しい風景を楽しんでいたのであるが、軍隊の視察時と同じく日本の上野公園が比較の対照に出てくるところが興味深い。

蔣介石は、ペトログラード滞在中その歴史遺産に深い感銘を受けた。イサク教会の「建築の広大さと壮麗さは実際めったに見られるものではなかった。」（一九二三年九月三〇日）彼は、一〇月一日にアレクサンドルからニコライまでの歴代皇帝が住んでいた部屋を見学した。「その建築の大きさ、装飾の華麗さは本当に贅をつくしたといわれるだけある。大理石と翡翠の柱と壁、床板は驚くべきものであった。」

蔣介石は、ロシアの皇帝たちが残した歴史的遺産を賞讃した。そこには、ロシアの帝政に対する批判的態度は見出されない。それと同時に、中国の歴史遺産との関連を意識した記述も見られない。その意味で、ロシアの歴史遺産は蔣介石にとって異質であった。その範囲内でロシアの歴史遺産は評価され、蔣介石がソ連に背を向けるよりそれを受容する要因として作用したのである。

蔣介石は、ソ連の日常生活について多くを語らなかった。彼は靴を買いに行って、高価であると感じたことがあった（一九二三年九月一四日）。日記を見ると、彼がたびたび劇場へ行った記録がある。しかし、食事や料理に関する言及は皆無である。ソ連の食事に満足していたのか、あるいは満足していなかったのか、またはその種のことを日記に書く必要がないと考えたのか、全く推測の域を出ないのである。

六　結　語

本稿において、一九二三年の蔣介石のソ連訪問について、以下のことを明らかにした。用いた主要な資料は、彼の一九二三年の日記である。

筆者は、この問題に関する既存の研究から三つの問題点を抽出した。①西北計画、②「反共」の諸問題、③蔣介石が見たソ連社会主義、がそれである。

蔣介石とソ連が目指したものの違いから、西北計画は実現しなかった。しかし、両者の交渉の過程から、蔣介石が西北計画を含む中国革命において軍事行動を重視していることが明らかになった。

蔣介石は、後年の反共的立場から、ソ連訪問中に感じたという以下の六つの「反共」の根源を指摘した。①ソ連側に国民党と長期的に合作する意図がないこと、②モンゴルを中心とした民族主義の問題、③ソ連における中国共産党員の振る舞い、④コミンテルンの中国問題決議の評価、⑤ソ連の政治体制の専制的性格、⑥訪ソ代表団の内部対立、がそれである。

筆者は、以上の論点を当時の蔣介石の日記のなかで検証した。確かに彼は、モンゴルの帰属をめぐるソ連との意識の対立を経験した。蔣介石はまた、ソ連に滞在する中国人の振る舞い・訪ソ代表団内部における共産党の影

響・ソ連の官僚に対する不快感を表明した。さらに、コミンテルンの中国問題決議を通して、蔣介石とソ連・コミンテルンとの間に、軍事行動の重要性・モンゴルの独立・中国革命における国民党の指導権をめぐって意見の相違の存在することが明らかになった。

その反面、蔣介石は多くのソ連の指導者に対し好感を示し、高い評価を与えた。このような問題を抱えつつ、彼はソ連との提携を強めつつあった当時の国民党を代表してソ連を訪問している以上、後年彼が述べているような反共的態度に直ちに転ずることはできなかった。このことは、やがて来るべき第一次国共合作における蔣介石の立場に関係してくる。蔣介石のソ連に対する感情と観察は、ソ連社会主義の現状に対する評価との対比において検討されなくてはならない。

筆者は、蔣介石のソ連社会主義に対する見方を、ロシア革命勝利の原因、ソ連社会の組織と運営、軍事、教育、風景・歴史・生活の諸側面から検討した。彼のソ連社会主義評価は、おおむね肯定的であった。特に蔣介石が注目したのは、国家としてのソ連の統一・強化・権力の浸透・その一環としての組織・紀律・軍事・教育であった。しかし、この評価にはイデオロギー的相違が留保されていた。その意味で、彼のソ連評価は、「本質的」であるというより「手段的」であった。

最後に、蔣介石のソ連評価と代行主義的指導との関連を検討する。第一の問題は、政治目標を達成するための人民の動員である。モスクワ到着早々、一九二三年九月二日蔣介石は「社会党」指導下で約二二万人が参加する大衆運動に遭遇し、それを「快挙」と評した。大衆の政治参加を前提としない動員の代償は、指導者によって上から与えられた福祉であった。その限りにおいて、大衆は指導者の指導権を脅かすことはなかった。蔣介石は、工場、都市と農村のソヴィエトを訪れる過程で大衆に福祉が行き届いていることを評価したのである。

第二の問題は、人民に政治意識を扶植するための教育の重要性である。その意味で、蔣介石がソ連で垣間見た

教育における党の指導は印象的であった。党の思想を軍隊に浸透させるための政治委員制度も彼の注意をひいた。

第三の問題は、政府・党の支配に対する人民の異議申し立ての制度の欠如である。蔣介石は、ソ連における政治のフィードバック過程に関心を示さなかったし、そのような状況を見る機会をもたなかった。あるいは、革命直後のソ連において、大衆が政府・党の支配に対して異議申し立てを試みる状況がなかったのである。

第四の問題は、指導部の権力維持・強化である。すでに言及したように、蔣介石は政府・党による統一、権力の浸透・強化、そのための組織と紀律に強い関心を示した。特に、軍事行動に対する関心はその重要な一環であった。そして、この点こそが蔣介石とソ連との対立の焦点であったのである。

（1）なぜこのような状況が生まれたかについては、拙著『中国近代政治史』（改訂版）、放送大学教育振興会、二〇〇七年、二三六～二三八頁参照。

（2）一九二三年の蔣介石の日記を筆写したものを、中国社会科学院近代史研究所研究員・楊天石氏に見せていただいた。その他の蔣介石の資料についても同氏の援助を得た。ここに、楊天石氏のご厚意に対し感謝の意を表する次第である。

（3）楊天石氏の筆者に対する二〇〇七年七月二六日付の手紙。

（4）宇野重昭「蔣介石の連ソ政策―ソ連視察旅行から中山艦事件まで―」、高木誠一郎・石井明編『中国の政治と国際関係』、東京大学出版会、一九八四年。

（5）王聿均「蔣中正先生訪俄及其観感」、蔣中正先生与現代中国学術討論集編輯委員会編『蔣中正先生与現代中国学術討論集―蔣中正先生与国民革命』第二冊、同編輯委員会刊、台北、一九八六年。

（6）楊天石「一九二三年蔣介石的蘇聯之行其軍事計画」、楊天石『蔣氏秘檔与蔣介石真相』、社会科学文献出版社、北京、二〇〇二年。

（7）毛思誠編『民国十五年以前之蔣介石先生』、龍門書店、香港、復印版、一九六五年、二〇六頁。
（8）楊天石、前掲論文、八八～八九頁。
（9）呉文律「戦略上之分岐：民国一二年蔣中正先生赴俄報聘之研討」、蔣中正先生与現代中国学術討論集編輯委員会編『蔣中正先生与現代中国学術討論集—蔣中正先生与国民革命』第二冊、同編輯委員会刊、台北、一九八六年、四八頁。
（10）蔣永敬「蔣中正先生赴俄考察記」、『近代中国』第一三六期（二〇〇〇年四月）、四七～四八頁。
（11）楊天石、前掲論文、一〇一頁。
（12）「巴拉諾夫斯基関於国民党代表団訪蘇情況的書面報告」（一九二三年一二月五日於莫斯科）、中共中央党史研究室第一研究部編訳『共産国際、聯共（布）与中国革命文献資料選輯（一九一七—一九二五）』第一巻、北京図書館出版社、北京、一九九七年、三四五～三四六頁（以後、『共産国際』と略記）。
（13）「巴拉諾夫斯基関於国民党代表団拝会斯克良斯基和加米涅夫情況的書面報告」（一九二三年九月一〇日於莫斯科）、『共産国際』第一巻、二八七頁。
（14）「加拉罕給鮑羅廷的信」（一九二三年一〇月六日於北京）、『共産国際』第一巻、二九五頁。
（15）「有国民党代表団参加的共産国際執行委員会会議速記記録」（一九二三年一一月二六日於莫斯科）、『共産国際』第一巻、三三〇～三三三頁。
（16）「国民党代表団関於中国国民運動和党内状況的書面報告」（不晩於一九二三年一〇月一八日於莫斯科）、『共産国際』第一巻、二九七～三〇二頁。
（17）「巴拉諾夫斯基関於国民党代表団拝会斯克良斯基和加米涅夫情況的書面報告」（一九二三年一一月一三日於莫斯科）、『共産国際』第一巻、三一一頁。
（18）「巴拉諾夫斯基関於国民党代表団拝訪托洛茨基情況的書面報告」（一九二三年一一月二七日於莫斯科）、『共産国際』第一巻、三四〇～三四一頁。
（19）「巴拉諾夫斯基関於国民党代表団訪蘇情況的書面報告」、三四六頁。
（20）「与廖仲愷書痛抉党政病根」（一九二四年三月一四日）、秦孝儀主編『総統蔣公思想言論総集』巻三六、中国国民党中央委員

会党史委員会、台北、一九八四年、一〇一～一〇五頁。

(21) 蔣中正『蘇俄在中国』、中央文物供応社、台北、一九五六年、一七～一八頁。

(22) 同右、一五～一七頁。

(23) 主として蔣介石の一九二三年の日記を用いる。特別の言及がないときは、日記から引用するものとする。

(24) 蔣介石「致俄外長齊采林書談本党民族政策」（一九二三年一〇月二六日）、秦孝儀主編『総統蔣公思想言論総集』巻三六、九三頁。

(25) 「共産国際執行委員会主席団関於中国民族解放運動和国民党問題的決議」（一九二三年一一月二八日於莫斯科）、『共産国際』第一巻、三四二～三四五頁。

(26) 「共産国際執行委員会会議記録」（一九二三年一一月二六日於莫斯科）、『共産国際』第一巻、三三九頁。

(27) 「有国民党代表団参加的共産国際執行委員会会議速記記録」（一九二三年一一月二六日 於莫斯科）、『共産国際』第一巻、三三〇～三三八頁。

(28) 「契切林給季諾維也夫的信」（一九二三年一一月一日於莫斯科）、『共産国際』第一巻、三〇七～三〇八頁。